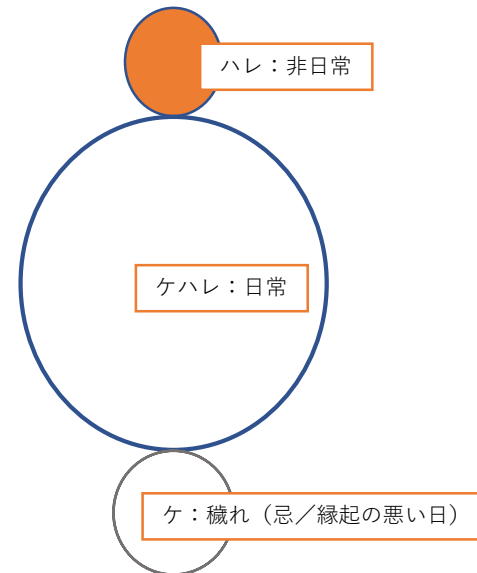


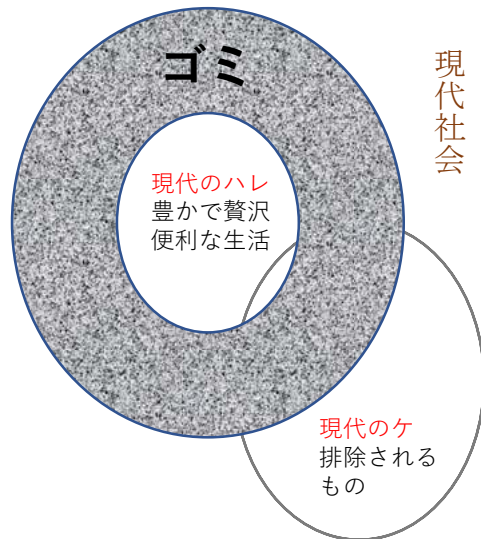
土井善晴／第2回食品ロス削減推進会議 配布資料
2019年12月12日提出

日本人はかつて左図のようなハレ・ケハレ・ケという世界観を持って生活していました。ハレ・ケハレ・ケとは、日常(ケハレ)は学問や仕事に励む日々・非日常(ハレ)は祭事や行事として感謝や労をねぎらう日・忌み日(ケ)は不幸を癒し死を悼む日の区別です。これは「贅と貧」のバランスを取り、生活の慎ましさの要となり、健康を維持する術にもなりました。例えば、大阪人の「ケチ」と言われた慣習は、遊びとして贅を尽くすための日常の戒めでした。そのような生活の態度は、結果として、自然との大調和を維持し、極めて美しい生活文化を作る因となりました。



戦後、かつてあった日本の生活の美徳は評価・価値を失います。人間は、常にハレという上層階層に対する羨望が働き、よりよい暮らしを望むものです。成長経済のもと、生活スタイルの変化によってハレという祭事、ご馳走を食べ、贅沢をすることに変化し、また贅沢の大衆化によって日常化が進み、現代版ハレができました。これは日本人が守り続けた自然との共存関係の放棄にもなっており、生活の秩序を失うことにもなりました。人間は急激な進歩発展によって、便利な暮らしを手に入れました。現代のケハレという観念(秩序)を失った生活の要のない生活を、あえて表すなら、左図のような形に変形していると思われる。これはゴミ生産社会です。

現代社会



和食の初期化（家庭料理の基本）

一汁一菜（汁飯香）とは、日常のケハレにある慎ましい食事の形です。味噌汁は、具沢山にすることで、おかずの一品を兼ねます。つまり、ごはんと具だくさんの味噌汁だけで十二分に完成する食事になります。一汁一菜を基本にすれば、具材の変化によって季節の移り変わりを味わい、また余裕を見つけて作るおかずにも、驚きや楽しみを発見します。それは「母」や「妻」だけの問題ではなく、つくってもらって食べる／自分でつくって食べる／つくって食べさせるという人生のどのステージ、老若男女のいかなるステータスにあっても変わることはない、食べること・生きることを満たす必要にして十分な営みです。

食は人の形を作るもの
食は国の形を作るもの

「あなたが食べているものを教えてください」「あなたがどんな人間か言い当ててみせましょう」フランスの政治家で美食家であったブリア・サバランが「美味礼讃」に記した有名な現代にも生きる言葉です。食の問題は、人間の本質と関わるのですから、一人一人の食のあり方は、国の形を表すものでもあります。

食品ロス削減に対して短期的な対処療法は、それぞれの立場においてすみやかに実行するべきと考えます。しかし、食の問題は、国の根本的な国の姿を作るものですから、この国の形を善きものにする機会でもあると考えるべきでしょう。そのためには、中・長期的な原因療法が必要であると思います。

もし、すべての人が「一汁一菜」を理解し実践すれば、家庭における食品ロスはなくなりません。一人一人が傷ついた地球をいたわっているという実感を持つことが大切です。地球は人間が自身の身体で生きられるかけがえのない唯一の住処（人間の条件）です。



「一汁一菜でよいという提案」（グラフィック社）より